

02・会って数時間なのにいっぱい治療キスされてとろとろにされて、オナ禁バレまでする

本編『01・面接に行ったら倒れて、声が出ない奇病に冒される』からそのまま続き。
とある年の春。

五月上旬。十八時すぎ。

場所はミネルヴァの屋敷内、実験室。

天気は晴れ。室温は二十二度程度。

とても心地よい夕方である。

部屋はとても広く、主人公はその中央にいる。

そこは石でできた一見冷たい印象の部屋だが、ミネルヴァの作った魔法装置のおかげで、快適な気温に保たれている。

SE1 外の環境音

【最初から最後まで流す】

【繰り返し流す】

【トラック01とは違う開始位置にして流す】

【部屋の外の音を、部屋の中から聞いている】

【0―5秒ほど流してSE2】

【その後、音量が小さくなる】

【ごく小さな音量で流す】

【トラック終了まで流し続ける】

そんな夕暮れのさなか、主人公は部屋の中央にあるベッドに、上半身だけを起こした状態で座っている。

対するミネルヴァはベッドの脇から身体を主人公の方へ寄せる形で……主人公に、何回かのキスをしたばかりだ。

そんな彼女は、今、身体を本格的にベッドの上に乗せようとしている。
主人公はそれを、ぼんやりと見上げ、受け入れている。

SE2 ミネルヴァがベッドの上に乗る音

【最初から最後まで流す】

SE3 ミネルヴァがベッドの上で移動する音

【最初から最後まで流す】

ミネルヴァ、『正面0センチ』の距離まで近づいて『無声音ささやき』をする。

●正面 0センチ 『無声音』ささやき ※マークのセリフまでささやく

「優しく、静かに、そつとささやく。」

自分の唾液、つまり薬液を流し込むために、口を開くよう主人公に促す。

主人公からしてみれば、これはキスでしかない。

だが、ミネルヴァとしては、真剣に治療を始めるつもりなので」

……口を開けて」※

〈主人公〉

「……あ……」

主人公、わけもわからぬまま。ただ、このまま信じてもいいような気がして、素直に口を開く。

人に口の中を見せるなんて、普段ならまずしない。

これまでの人生すべてを含めたって、せいぜい幼い頃母親に歯磨きをしてもらった時と

か、歯科医に診てもらおう時位しかない気がする。

だから少々戸惑うが、ここでふと主人公は気づく。

……ああでも、これは医療行為なんだったわ。

だったら、いいのかしら。

と。

それでも、こんな治療法など聞いた事がない。

だが、ミネルヴァは自分のやり方は少々特殊だと言っていた。

だから、こういった事もあるのだろう……。

そう己を納得させ、この行為に身をゆだねていく。

主人公は自他ともに認める『『なんで』と聞かずにはいられない系』のはずなのに、この時だけはなぜか、理由を尋ねようとしなかったのだ。

〈主人公〉

「……ん」

ミネルヴァ、『正面0センチ』の距離で、引き続き『無声音ささやき』をする。

●正面 0センチ 『無声音』 ささやき ※マークのセリフまでささやく

「※2回※ キスする。」

主人公が今開けた口へ、直接自分の舌を入れる。

そして、口の中で舌が当たって音がするキス」

れえろっ……。

ちゅっ♡

【※2回※ 呼吸する。

そっと唇を離して、息が漏れる。

主人公の今の口の開け方では思うようにならないので、もっと開けてほしいと考える】

んっ……。

……ふう。

【静かに、そっとささやくように。

先ほどより少し切なげに、セクシーに。

さらに口を開けるように促す。

ミネルヴァとしては、最大限優しい口調で言おうとしているだけだが、それがセクシー

に聞こえる」

もう少し……大きく」※

〈主人公〉

「……んっく……」

主人公が、この行為を受け入れている理由。

それはミネルヴァの言葉を信じ、これを、治療の一環として認識しているからだ。ただ、それだけ。それだけのはずだ。

それでもキスされるたび、主人公の脳は甘く痺れる。

無意識のうちに目を閉じ、小さく震え息を漏らして、舌まで広げて。ミネルヴァを、自分から受け入れようとしている。

どうしてこれで治せるのかは、正直な所、まったくわからない。

だが、少なくともミネルヴァは、ある一点において嘘をついていなかった……。という事だけはわかった。

なぜなら、この行為は、気持ちよかった。

自分は今、病を治すために『これ』をされている。

そう常に意識していないと、流されるままにいつまでも繰り返してしまいそうなほど……ミネルヴァとのキスは気持ちよかったのだ。

ミネルヴァ、『正面0センチ』の距離で、引き続き『無声音ささやき』をする。

●正面 0センチ 『無声音』ささやき ※マークのセリフまでささやく

「少し嬉しそうに。

『そうだ、そのくらいの大きさだ』という意味で言っている。

少し切なげに、セクシーに。

ミネルヴァとしては、最大限優しい口調で言おうとしているだけだが、それがセクシーに聞こえる」

……そう」※

ミネルヴァ、『正面0センチ』の距離でキスする。

●正面 0センチ 『無声音』ささやき ※マークのセリフまでささやく

「【※息遣い※】のみで表現する。

そつと唇を近づける」

んっ……。

【※7回※】キスする。

先ほどと動きは同じだが、先程よりも大きな音がする。
再び、主人公が今開けた口へ、直接自分の舌を入れる。

そして、口の中で舌が当たって音がするキス」

ちゅっ ♡

ちゅっく……ちゅ ♡

れえんろ……。

ちゅっ ♡ ちゅっ ♡

ちゅばあっ…… ♡

【※2回※ 鼻で呼吸する。

そっと唇を離しながら、鼻で吸って吐く。

ミネルヴァには特にそのつもりはないのだが、セクシーに聞こえる】

ふー……。

ふう。

【※3回※ 呼吸する。

とてもゆっくり呼吸をする。

まだ余裕がある。

ミネルヴァは今『治療とはいえ、なんだか緊張するわ。こんな事をしたのは初めてだから』と、まだ己を客観視できているので」

はあ……はあ……。

はあ……っ。

【※2回※ 鼻で呼吸する。

小さく鼻で吸って吐く。

まだ余裕がある。

ミネルヴァは主人公を、責任をもって治療したいと願っている。

だが同時に『なんだか妙ね。想定しなかった感覚がある……』と思い始めている。

主人公とのキスが、想像もしなかったほど気持ちよかったので」

……すーっ……ふう。

【※4回※ キスする。

ゆっくりと、一回ごとに間を置く、軽く触れるだけのキス。

だが、だんだん熱が入っていく」

ちゅっ ♡

……ちゅっ。

ちゅっ。

……ちゅっ ♡

【※1回※ 鼻で呼吸する。

唇を離して、とてもゆっくり、長く小さく鼻で吸う。

ミネルヴァは今、未知の感覚に内心驚いており、呼吸と気持ちを整えようとしている。
『たとえ想定外の事があっても、いま彼女を治せるのは私だけ。だから、しっかりしないと。自分を頼ってくれている彼女に応えなくちゃ』と思っているので
ふー……。

【※6回※ キスする。

今度はねっとりとした感じで。

また、主人公が開けた口へ、直接自分の舌を入れる。

そして、口の中で舌が当たって音がするキス。

無意識のうちに、さらに熱が入っていく」

れえろお……ちゅぷっ♡

ちゅ♡ ちゅっ♡ ちゅっ♡

ちゅぷっ♡

【※舌を出したまま※ 話す。

『そう、その調子』が『ひよお……ひよのひょうひ』になる」

ひよお……ひよのひょうひ。

【※息遣い※ のみで表現する。

そっと唇を近づける」

んっ……。

【※1回※ キスする。

軽く触れるだけのキス】

ちゅ♡

【※6回※ 鼻で呼吸する。

そっと唇を離しながら、鼻で吸って吐く。

ミネルヴァには特にそのつもりはないのだが、セクシーに聞こえる】

ふーっ……はあ。

ふー……っ。はあ。

ふーっ……はあ……。

【※しばらく※ キスする。

舌を口の中に入れた後、ゆっくり、ねっとり、口の中をなぞるようなキス。

静かだが積極的に。ミネルヴァからも求め始めている感じで】

れれれれ……ちゅふっ♡

れえろお……ふちゅっ♡

【※1回※ 鼻で呼吸する。

とてもゆっくり、長く小さく鼻で吐く】

……ふー……。

【※3回※ 呼吸する。

少しだけ早い呼吸。先ほどよりも余裕がなくなっている。

主人公とのキスに、治療以外の意味や感情を持ち始めているので」

はあ……はあ。

はー……っ。

【※5回※ キスする。

軽く吸うようなキス。

自分の、想定していなかった行動をごまかすようなキス」

ちゅ♡

ちゅるる……。。

ちゅ♡

ちゅっ。……ちゅ♡」※

ミネルヴァ、話しながら『正面0センチ』から『正面15センチ』まで離れる。

● 正面 0～15センチ

「【※離れながら話す※

※1回※ 呼吸する。

ちよっと甘ったるく。

少し動揺しているような、荒くセクシーな呼吸。

聞き手と主人公に『なんだか、さっきまでと少し様子が違う』と思わせる感じで「はああっ……」。

【※4回※ 呼吸する。

早く浅い呼吸から、だんだんゆっくりと整った、深い呼吸になる。

自分の心情や呼吸よりも、今の主人公に伝えたい重要な事があるので」

ふー。ふー。

……ふー。

……ふー……っ」

そこで一度唇が離れ、二人の間を、だらんとだらしなく糸が引く。

普段の主人公なら、それを見た途端、絶対に凝視する。

それから途端に恥ずかしくなって。大急ぎでそれを断ち切ろうとする事だろう。

我に返り、大げさなくらいに口を拭って。それどころか、せっかく施術してくれたミネルヴァに、失礼な事まで言ってしまうような気がする。

そんな自分がありありと想像できるのに、実際の主人公はまるで違った。

熱っぽい頭で、全く違う事を考えていたのだ。

……どうしよう。

まずい。……いけないわ。

……もつとしたい。

もう、治療でもそうじゃなくてもいいから、もつとしてほしい……。

何これ。一体わたし、どうしちゃってるの。

わたし、こんな人じゃなかったはずなのに。

どうして。どうして急にこんな事になっちゃったの……。

と。

ミネルヴァ、『正面0センチ』の距離で『無声音ささやき』をする。

●正面 0センチ 『無声音』ささやき ※マークのセリフまでささやく

「【なんとか理性を取り戻そうとする。

まだ軌道修正できそうだと思っているので】

……声を、出してみて。きっと、もう話せるはずよ」※

〈主人公〉

「……あ」

だがここで、意識は急に現実に戻された。

ミネルヴァは『医師』として主人公を気遣う声音で尋ね、ならば主人公もならうほかない。

『患者』として、率直な感想を述べる。

〈主人公〉

「……話せる。

大丈夫になった、みたいです。……すごい……」

ミネルヴァ、主人公と会話したり、その容態を見たりするために『正面30センチ』の距離まで離れる。

● 正面 30センチ

「【※息遣い※】のみで表現する。

感激をこらえきれない、といったため息をつく。

これまでとのギャップを際立たせる。

主人公と聞き手に『この人、ちゃんと感情らしい感情があったんだ』と思わせるほどに」
……………！」

その時、ミネルヴァが今にも泣き出しそうなほど、ホツとした表情を浮かべた。

● 正面 30センチ

「【※息遣い※】のみで表現する。

一度あふれそうな感情を抑えた後、ものすごく安心したため息をつく。

先程同様、これまでとのギャップを際立たせる。

主人公と聞き手に『この人、ちゃんと感情らしい感情があったんだ』と思わせるほどに」
……………っ。

ふー……………っ」

〈主人公〉

「……………すごい。効果覲面ですね」

だから主人公も思わず微笑んで、この実験室に、ようやく和やかな空気が流れる。

それにしても、すさまじい効果だ。

ミネルヴァが一体、どんな事を施したのか。それは結局、主人公には、なんとなくしかわからない。

だが、声は先ほどの出しづらさなどなかったようにすんなり元に戻り、息をするのも、すっかり楽になっている。

頭痛もいつの間にか引いたし、呼吸時にしていたあの嫌な音も、最初からなかったみたいに消え去っているではないか。

この即効性は、高い技術のなせるものだと思う。

ただ単にキスが気持ちよかったというだけでは、仮に頭痛が軽くなるくらいの事はあったとしても。喉が通る事はないはずだからだ。

●正面 30センチ

「【大きく息を吐いて、安堵した様子で。

ここからセリフ終わりにかけて、元のトーンに少しずつ戻っていく。

まだ、感動が伝わる程度には感情がある。

それでも、他の人と比べると無感情程度。

しかし、まだ、主人公の容態は完全に安全とは言えない。なので『主だった』という表現をする」

……よかった。

これで、ひとまず安心だね。

主（おも）だった危機は去りました。貴方は治ります」

〈主人公〉

「よかった……」

だから主人公は、話せるようになったこの口で、ミネルヴァに今の気持ちを伝えようとした。

まずはきちんとお礼を言って。それから、今後どうすべきか指示を仰ごうとしたのだ。

●正面 30センチ

「とても優しい声で。

優しく、ホッとした様子で。

これまでとは違い、明確に感情がある感じで」

よかったわね」

〈主人公〉

「……………！」

だが、そうする数舜前に、ミネルヴァが笑った。

これまで、こちらが注意深く見ていなければ違いを把握できない、難易度の高すぎる間違い探してみたいな感情表現をしていたくせに。

今、はつきりと主人公へ向かって。笑顔を見せたのだ。

そのせいで主人公は、思わずきゅんとしてしまった。

……そうだ。そうだった。

先程の行為が刺激的すぎて忘れかけていたが、ミネルヴァは元々、人外と見紛う程美しいのだ。

後、それから、想像していたよりもずっと話しやすいし、妙に素直でストレートというか、なんだか、無垢な女の子みたいな雰囲気のある人だと思う。

美人なら、親友で見慣れているつもりだった。

でも今は、そんな風にミネルヴァの人柄も理解し始めている事で……主人公はつい、素直に見とれてしまったのだ。

……えっと。いけないわ。

だめだめ。

そうだ。ここは。ここは真面目な話をして空気を戻しましょう。

しかし、いつまでもぼーっとしている訳にもいかない。

主人公はどうか気持ちを整えると、おずおずと口を開いた。
先ほどから気になっている事についてだ。

〈主人公〉

「……あの」

● 正面 30センチ

「優しく続きを促す。

まだ、比較的感情が伝わりやすい。

主人公の言葉は、どんなものであれ真剣に聞きたいので
うん？」

〈主人公〉

「推測で、申し訳ないのですけれど」

● 正面 30センチ

「少し心配そうに。」

主人公が魔法薬師として、彼女なりの意見を述べようと思っているのかと思ったので。質問しているが、語尾は上がらない」

……あら。

もしかして、まだ話しづらいの。

まだ、どこか辛い所があるのかしら」

すると途端に、ミネルヴァが心配そうな顔をする。

正直な所、その『わかりやすさ』は意外だ。

もう認めよう。主人公は、先程から少々様子がおかしくなっている。

だが、ミネルヴァもまた、心なしか。先程から、より伝わりやすい態度を心がけてくれているような気がする。

……よかった。これなら主人公でも、何を考えているのかわかりそうである。

〈主人公〉

「……あ。

いえ、身体は、……っ、大丈夫です。

わたしが気になっているのは……貴方の、身体の事。です」

だが、今度は主人公がいけない。

新人中の新人とはいえ、魔法薬師として、真剣に話をしようとしたのに。

ミネルヴァにまじまじと見つめられると落ち着かず、言葉を詰まらせてしまったのだ。

その上主人公はある事にまで気づいて、気づかれぬように、さっと足を閉じる。

……スカートの中が、ぐちゃぐちゃに濡れているのだ。

……どうしよう。

どういう事なの。ありえないわ。

ミネルヴァさんは、真剣にわたしを治そうとしてくれてるのに。

わたしといたら、ちよつとどうかしてる……。

いったい、何を期待しているというの。

その自覚とともに、主人公の心は羞恥で染まっていく。

信じた通り、先程のあれは医療行為だった。

それなのに主人公は、あのたった何回かのキスで性的快感を得てしまったのだ。

今だって、鬱陶しいほどに肌へ下着の張り付きを感じる。

掛け布団をめくったら、においでバレてしまいそうだ。

そのくらい、そこはぐずぐずに潤っていた。

相手は恐らく何とも思っていないだろうひと時で、主人公は一方的に気持ちよくなってしまったのだ。

●正面 30センチ

「【きょとんと不思議そうに。

『答えるのは構わないけれど、どうしてそんな事を？』という感じで。

ミネルヴァからしてみれば、今の主人公は『今は他人の事などではなく、自分の身体のことを考えていてほしい』といった状況なので」

うん……？

私の身体が気になるの？」

〈主人公〉

「……はい」

だが、ミネルヴァはまだ気づいていないらしい。

そのおかげで主人公も会話を続ける事に成功し、引き続き尋ねる。

〈主人公〉

「もしかして、貴方の身体って……」

そう。先ほど気になったのは、ミネルヴァの……その、唾液の事だ。

ごく些細な違いではあるが、それはほんのりと甘く、果実のような味とおいがしたように思う。

人間の唾液は、あのような味はしないはずだ。

いや、もしかすると主人公が知らずに二十二年育ってしまっただけで、主人公以外の個体の唾液には味がするのもかもしれないが……それは少々考えにくい話だろう。

少なくとも、質問する価値はある事だと思った。

● 正面 30センチ

「【※息遣い※】のみで表現する。

感心して息をのむ。

ミネルヴァは、ここですでに、主人公の意図を理解したので。

主人公は今『ミネルヴァの身体は、特殊な状態になっているのではないか』と指摘しよ

うとしている。

それは、主人公にとっては『こんなの、すぐにわかる事』程度の事である。

だが、ミネルヴァは本気で感心してキラキラしているのだ――

……まあ……。

すごいわ。

「淡々と、だが嬉しそうに。」

主人公に質問された事で、思わずおしゃべりになる。

ミネルヴァは自分が作った薬について、本当は誰かに話したくてしやうがなかったのだ。

それが、ある程度以上に知識がある魔法薬師。

つまり、主人公ならなおさらである。

それにミネルヴァは『できるだけ丁寧に話すのがいいだろう』と考えている。

自分が説明不足傾向なのは常に気を付けて是正したいし、特にこの件は人に話したくてしやうがないし、主人公としても、必要な情報だろうと考えたので――

貴方には、魔法薬師（まほうやくし）の資格があると聞いていたけれど。

流石。理解が早いね。

そうよ。貴方の言う通り。

今の私の身体は、全身が、この病（やまい）に対抗する薬液（やくえき）になっている。

髪の毛から爪先に至るまで、特効薬に等しいものが染み渡っている状態なの。

【少し間をあけてから。

自分の手や、爪に目を落としてから話しているイメージで。

『体液』は何も気にせず、さらっと言う」

皮膚もそうだし……唾液だけでなく、全ての体液もそう。

【己の身体について補足する。

つまり、今のミネルヴァの身体なら、皮膚と皮膚が触れ合う事でも治療ができる。

なので、実は『ずっと裸で密着している』という方法も、理論上は可能である。

だが、本編01でも触れた通り、それは時間がかかりすぎるし、その方法で治療できる確証はないので。

また、この身体は、いつまでも維持できるものではないので」

けれど、この身体は少々無理やり作ったものだから。

長くはもたない。

【『じき』は『じきに』の略】

じき、元の身体に戻ってしまう。

それ故に、少々急がなくてはならなかった。

だから、こういった方法で施術させて頂いたの」

〈主人公〉

「じゃあ……」

これでもう、施術は終わりという事だろうか。

ミネルヴァの言葉が過去形になった事に主人公は安堵するが、同時に少々落胆しているのにも気づいて、また恥ずかしくなる。

本当なら主人公は、魔法薬師として。ミネルヴァが技術的にとんでもない事をしている事や、その仕組みについて関心を持ち、もっと専門的な質問をするべきだ。ミネルヴァとしても、それを想定して説明した側面があるだろう。

だが、実際の主人公はそれらをあっさり受け流し、彼女とこれからどうなるかという事ばかり考えていた。

……だって、もしかまだ治療が終わっていないのであれば。

もしかすると、もっとキスしてもらえないか。

先の言葉通り。

『気持ちよくしてもらえ』んじゃないかしら……。

などと。

そんな、あまりにもあさましくて恥ずかしい期待を、主人公はしていたのだ。

そんな自分に気づくと、途端に身体の奥がぎゅっと疼くような気がして。

この一か月ほどの間必死に抑え込んでいた、処理しきれていない欲望が、一気に首をもたげてくる。

まずい。それだけは、それだけは……ちゃんと抑え込んでおきたかったのに。

●正面 30センチ

「【少し申し訳なさそうに。

主人公はもう『よかった！ これで治療は終わった！』と考えているのではないか、と判断しているのです。

実際の主人公は先ほどのキスの事で頭が一杯で『あわよくばもつとしてほしい。もっと気持ちいい事をさりたい』と思っている事には、全く気付いていない」

ええ……だから。声も出せるようになった事だし。

できる事なら『薬液の注入は完了しました。治療はもう終わりです』と、言いたい所だけれど」

SE 4 ミネルヴァがベッドの上で移動する音2

【最初から最後まで流す】

【こちらへ、ぐっと近づいてくる】

ミネルヴァ、主人公の顔をよく見るために『正面15センチ』の距離まで近づく。

● 正面 15センチ

「『少し心配そうに。』

主人公の瞳をじっと見つめながら話している。

ミネルヴァは今『医師モード』に戻っているので、キスの時のようにドキドキしていない」

……まだ、瞳の色が変みたい」

ミネルヴァがそう言って、また近づく。

その時、己の心によぎった感情を、主人公は必死に否定した。

『瞳の色が変』だと、『これからどんな風にして』身体を調べられるのか。

それについて考えを巡らせる事を、断固拒絶した。

だって、たとえ頭の中であっても、今の気持ちを言葉にしたら。

……自分はどうしてもない淫乱だと、認める事になるからだ。

ミネルヴァ、話しながら『正面15センチ』から『正面0センチ』まで近づく。

●正面 15〜0センチ

「【※話しながら近づく※

少し心配そうに。

主人公の瞳をじっと見つめながら話している。

ミネルヴァは今『医師モード』に戻っているので、キスの時のようにドキドキしていない」

もう少し、貴方の身体を調べさせて頂けるかしら」

〈主人公〉

「……………」

主人公が答える前に、ミネルヴァの顔が近づいて、また唇に触れる。

それはきつと……先にもう主人公が目を開じていたからだろう。

●正面 0センチ

「【※1回※ キスする。

軽く吸うようなキス。

まだ、医療行為としてのキスの気持ちでそうしている」
ちゅっ。

【ここでふと、何かに気づいた様子で。

無感情気味だが、少しだけ気持ちよさそうな感じで。

主人公とキスした時に施した『とある術』が、機能し始めてきたのに気づいたので」
……あ」

ミネルヴァ、話しながら『正面0センチ』から『正面30センチ』まで離れる。

●正面 0～30センチ

「【※6回※ 呼吸する。

少し切なげに、とてもゆっくり呼吸をする。

呼吸しながら、少し離れる。

『とある術』の効き目を確認する事に集中したので。

この『とある術』とは、主人公と自分の身体の感覚を合わせる術の事。

つまり、ミネルヴァは今主人公が今感じている身体や興奮が、少し遅れて流れ込んでいる状態である。

具体的には、主人公がミネルヴァとキスしている時の快感が、ミネルヴァの体内に走っ

てきている状態」

はあ、はあ。……ふう。

はあ、はあ、ふうっ……。

【少し切なげに、また少し申し訳なさそうに話す。

とても気持ちがいいので。

だが、主人公を治療するためには、この気持ちよさにのまれるわけにはいかない。
なので、なんとかこらえて話す。

そのせいで『一体何が合っているのか』という説明を、完全に忘れている。

『合ってきた』『合わせた』『合ってくる』には『』がついているが、特に強調せずに通
常通り話す」

少し、待ってね。

……『合ってきた』みたい。

今は『合わせた』ばかりだから……少々遅れて貴方の感覚を理解しているけど。

そろそろ……完全に『合ってくる』はずよ」

〈主人公〉

「？」

だがここでミネルヴァはキスをやめ、不思議な事を言い出した。
おまけになんだか……少し苦しそうにしている。

だから主人公が気遣うべきか、質問すべきかと迷っていると。

その短い間にも、ミネルヴァの呼吸は少しずつ荒く、甘ったるくなっていく。
いったい、何が起きているのだろう。

● 正面 30センチ

「【※6回※】呼吸する。

少し切なげに、とてもゆっくり呼吸をする。

とても気持ちがいいので。

先ほどよりも少し余裕がなさそうに」

ふう、ふう、ふう。

ふう、ふう。

ふー……っ。

【低く、小さく喘ぐ。

びくつと、小さく反応する。

少し驚いているので。

『合った』事により特に強い快感が押し寄せ、その強さは想定外だったので」

んっ……く。

【※息遣いのみ※】で表現する。

ものすごくゆつくりと、耐えるように呼吸する。

今ここで快感にのまれると、治療にならないので」

ふーっ………

【※2回※】呼吸する。

吸って、なんとかこらえて、小さく息をつくように吐く」

はああ……ふう。

【うっとりと言のように。

先程は驚いたが、それによって術が成功した事を確信できたので」

ああ……。

早速『合ってきた』みたい。

……よかった」

〈主人公〉

「??」

こうして主人公は、再び置いてきぼりにされた。

身体はさらなる『治療』を求めて熱いのに、今はそうさせたミネルヴァの方が、しっかりと高ぶっていつているように見えるくらいだ。

●正面 30センチ

「※3回※ 呼吸する。

少し早く、耐えるように呼吸する。

とても気持ちがいいので」

はし。はし。はし。

「とても小さく、かわいく喘ぐ。

小さいが明確な変化として、聞き手と主人公をドキツとさせる感じで」

……あ……。

「※7回※ 呼吸する。

だんだん乱れていく、切なげな呼吸。

『合った』事により、主人公の身体が今どんな風になっているかを、深く理解したので」

はあ……。

はあ、はあ、はあつ。

はあ……はあ……はあ……つ。

「低く、こらえるように喘ぐ。

快感に耐えているという事が、聞き手と主人公に明確にわかる感じで」

んっ……♡

【※2回※ 呼吸する。

とてもゆっくり吸って、なんとかこらえて、小さく息をつくように吐く】

はー……。

ふう。

【少し困ったように。

『あら、そんなに貴方の身体は、気持ちいい事を求めていたの？』といった意味の事を言おうとしているが、ミネルヴァ自身、自分が何を言おうとしているのかわかっていない。

なので、途中で途切れる】

……っ、あら。

そんな……♡

【※1回※ 呼吸する。

とてもゆっくり吐いて、なんとかこらえる】

ふー……♡

ミネルヴァ、話しながら『正面30センチ』から『正面0センチ』まで近づく。

●正面 30〜0センチ

「近づきながら話す。

少し申し訳なさそうに。

だが、有無を言わせないほど当たり前に」

ちよつと……御免なさいね。

【※1回※ キスする。

軽く触れるだけのキス。

治療とは無関係なのに、ただ自分がしたいからという理由でキスしてしまう」

ちゅ♡」

そして主人公はまた、わけもわからぬままにキスをされた。

もはやすでに遠慮の色も薄いというか、当たり前のような触れ方だ。

……けれど、わかるような気もする。

キスというものは、その回数がゼロから一になる時はあんなに困難なものに思えたのに。

一回してしまえば、もう二回目からは極端に難度が下がって、ごく自然なものになって

いくように思える。

もっともそれは、恋人同士のキスに限った事だと思うが……。

●正面 30〜0センチ

「※3回※ 呼吸する。

だいふ荒くなった、切なげな呼吸。

ただでさえ自分も気持ちいいのに、主人公と感覚を合わせた事で、二人分の快樂を受け取っているのです。

逆に言えば、今のミネルヴァは、二人分の快感を受けて、この反応となっている」
はーっ……♡ はーっ……♡ はーっ……♡

「小さくびくくと震える。

とても気持ちがいいので」

……あ。

「少し戸惑ったように。

想定外の快感だとは思っていたが、それを理解してなお、さらに気持ちがいいので。

以前患者の『痛み』を共有した時は耐えて治療ができたのに、今回は難しいほどの衝撃なので」

あっ……？ そんな……♡

「※6回※ 呼吸する。

だんだん乱れて、荒くなっていく。

耐えるのも困難になってきたので」

はーっ……♡ はーっ……♡ はーっ。
はーっ、はーっ。はあぁっ……♡

【なんとか話し出す。

あくまでこれは治療だと、決して忘れてはいけけないので。

だが、また説明を飛ばしてしまっている。

『これでは主人公は、今ミネルヴァの身に何が起きているのかわからない』というところ
ろに考えが行っていない」

そ……れでは。

貴方の身体の、どこに異常が起きているのか、入念につ、確かめていきましょう。

……大丈夫よ。

ちゃんと……丁寧にして。大切にやるから」

〈主人公〉

「あっ……♡

えっ……えっと。

ミネルヴァさん。その前につ……」

「【※ここからセリフ終わりまで、少々苦しそうに、快感をこらえるように話す※きよとんと不思議そうに。

主人公が何を聞こうとしているのか、見当もつかないので」

え？」

だが、この言葉で、主人公はようやくミネルヴァを止める事が出来た。

先ほど主人公は確かに『流されるまま気持ちいい事をされたい』と思った。

正直、今もそうしたい。

『彼女がそうしてきたから』『これは治療らしいから』そんな理由で、無責任に快楽を享受したい。そう思っている。

だが、それでは、いくらなんでも自分らしさを放棄してはいまいか。

主人公は今、ずっと追いついてきた夢を見失い、努力の果てにつかんだ仕事は自分から捨ててしまった。受けたい試験も受けられずに終わりそうだし、家族には長姉らしい事ができるか不安である。ようやく得た仕事も、一か月のアルバイトだ。

己の将来について悩み始めたらきりがなく、我ながらお先真つ暗のところにいると思う。でも、だからといって自暴自棄にはなりたくない。

せめて、今何が起きているかくらいは理解して、自分の頭で判断させてほしい。

『ただ一回質問をするだけで、何を大げさな』と言われそうだが、主人公は『何も知らないまま流されるだけの弱り切った女の子』になる事はだけは嫌だったのだ。

だから主人公は聞いた。

自分が二度と話から置いて行かれないように、自ら尋ねた。

〈主人公〉

「……『合う』って……何の事ですか？」

● 正面 30センチ

「【※】ここからセリフ終わりまで、少々苦しそうに、快感をこらえるように話す※
主人公がちゃんと質問した事に、感心している感じで。

『ああ、その事ね。よく聞いてくれたわ』という感じで。

ミネルヴァは今、またしても自分の説明不足が原因で主人公が困惑しているのに『質問した主人公はえらい！ すごい！』といった気持ちになっているので。

またも説明不足な事、話の順序を飛ばしている事に自覚がない」

ああ……。

【以後、ミネルヴァなりに丁寧に説明する】

『合う』というのはね。

言葉の……ままよ。

貴方の身体と私の身体の感覚を合わせて……私の身体に反映させる、という事。

これは、患部を探る時に用いる、私の、術。

つまり……今、貴方が感じている感覚は……ん。

私のものでもある、という事ね」

〈主人公〉

「なる……ほど……？」

そんな葛藤の末に勝ち取った答えは、わかるような、わからないような奇妙なものだ。だが、自分らしい行動はできたような気がして、多少の安心感とともに、

……そう。そうよ。

ミネルヴァさんの事は信頼している。信頼し続けたいと、思っている。

だけど、この人が少々説明の足りない方らしい事は、この短時間でも十分すぎるほどわかったのだから。

変だな、おかしいなと思う事があったら。

今みたいに、すぐに、こうやって尋ねなくてはいけないわ。

といった意識が戻ってくる。

●正面 30センチ

「※3回※ 呼吸する。

少し切なげに、とてもゆっくり呼吸をする。

とても気持ちがいいが、それをゆっくり整えるために呼吸している」
ふう……ふう……はーっ……。

「とても嬉しそうに、安心した様子で。

『少なくとも、主人公に不快感を与える事はなかった』という事に安堵しているので。
ところで、ミネルヴァは『合う』事によって自分が受ける影響について一切考慮していない。

『合った』結果自分が受けるのが、苦痛であろうと快楽であろうと関係ないと思っ
てる。

ただ患者の事だけを考えているので。

『ああ』は感嘆の『ああ』

……ああ。よかった。先の行為で……。
とても、気持ちよくなってくれたのね。

【※3回※ 呼吸する。

少し切なげに、とてもゆっくり呼吸をする。

とても気持ちがいいが、それをゆっくり整えるために呼吸している】

ふう……ふう……はーっ……。

【苦しそうにしつつも、真剣に考えている。

思わず快感に負けそうになるが、主人公の容態が気になるので】

でも……まさか、これ程なんて。

私も、少し驚いてる。

もしかして。

それ程までに、貴方の身体は弱っていたのかしら……」

〈主人公〉

「！」

だが、今日の主人公の情緒は、どこまでも安定しない。

その指摘に、ミネルヴァの気遣うような声に。

一気に心臓がびくつと跳ね、思わず『はい、そうです』と認め甘えたくなくなってしまったのだ。

だけど、誰がどう見てもわかるだろう。

ミネルヴァは今、目の前の患者を心配しているだけだ。

主人公は今、弱り目に優しい言葉をかけられて、いつもより感動しやすくなっているだけだ。

それなのに、それだけで、主人公の心は大きく揺さぶられている。

今にも……おかしい錯覚をしてしまいそうなくらいに。

●正面 30センチ

「【※】ここからセリフ終わりまで、少々苦しそうに、快感をこらえるように話す※」
主人公が今感じているだろう不安に、ミネルヴァなりに真摯に答える。

『自分も以前、実験としてこの病を故意に罹患して経験し、自力で治した。なので、治療は限定的に確立しているので、安心してほしい』という意味で言っている。

また、この狂氣的な治療法の確立について、さらっと、あっさりと述べる。
ミネルヴァにとってはごく自然な事なので。

『どう』には『』がついているが、特に強調しない」

でも……大丈夫よ。

この病にかかった時『どう』なるのか。

私は既に知っているわ。

この身をもって体験したから。

【心配そうに、主人公をいたわるように話す。

同じ病気のはずなのに、主人公とミネルヴァのそれは、重さが想定以上に違う。

それは主人公の精神的な問題が要因だろうと考えているので】

けれど……その時は貴方程重くはならなかった。

それは、恐らく、精神的な苦しさの度合いの違い。

つまり……私とこんなに差が出る位、貴方は辛かったのね。

……私には、貴方の気持ちを完全に理解する事はできない。

けれど……貴方がここまで病を進行させる程に悩んでいた事は、わかったつもりよ」

〈主人公〉

「……………！」

その時主人公の喉を、いよいよ弱音がつきそうになる。

『先ほどは強がって否定したけれど、本当はあなたの言う通りなんです』

『本当はもう、自分が今後どう生きていきたいのかわからなくて、途方に暮れているんです』

そんな本心を、つい打ち明けそうになる。

●正面 30センチ

「【※】ここからセリフ終わりまで、少々苦しそうに、快感をこらえるように話す※ 次の話題に移る。

まだここから、言いたい事があるので
でも……」

だがそれは、ミネルヴァの次の言葉によって、実行されずに終わった。

それに安堵するが、少し残念にも思う自分がいる事を、主人公はもうわかっている。

●正面 30センチ

「【※】ここからセリフ終わりまで、少々苦しそうに、快感をこらえるように話す※ 意図せず、ちよつと意地悪な事を言ってしまう。

ミネルヴァとしては率直な感想を述べただけなのだが、主人公には、いやらしい言葉で煽られているように感じられる」

っ、治療……っ、なのに。

【※7回※ 呼吸する。

少し切なげに、とてもゆっくり呼吸をする。

主人公に伝えたい事があるのに、快感のあまりうまく話す事ができず、もどかしい」

……ふう。

はあ、はあ。ふうっ……。

【小さく、飲み込むように喘ぐ。
何とか快感に耐えているので
んっ……。

【優しく、なんとか微笑みながら。
ミネルヴァとしては、全く他意はない。
むしろ嬉しくて、安堵している。

主人公が今感じているのが苦痛や不安だったら、ミネルヴァはその方がよっぽどつらいので。

『貴方が気持ちいいようでよかった。私も安心したわ。ここまでとは思っていなかったけれど……』くらいの気持ちで言っている。

だが主人公には、いやらしい指摘を受けているように感じられてしまう」
こん……っ、なに。気持ちよくなっているなんて……。

【※特に聞き手と主人公をドキッとさせるイメージで※

少し困ったように、優しく言う」

いけない人ね……？」

〈主人公〉

「……………っ！」

そしてミネルヴァの一言一言に、主人公は恥ずかしくなって、嬉しくなって。泣きたくなっ

てぼっとして。それから、また、ものすごく恥ずかしくなって。いよいよ激しくかき乱された。こんな目に遭ったら。ただでさえ強くない主人公の心は、もうめっちゃめっちゃだ。

原理はわからないが、感覚を『合わせる』術というのは本物で、そのうえ一方通行らしい。

自分が感じている快感についてまで把握されて、主人公の鼓動は羞恥心と、自分でも説明のつかない開放感のようなもので激しく揺さぶられている。

今すぐ逃げ出したい。

でも、このままここにいたい。

彼女の声や熱、においを感じていたい。

そんな相反する欲望のせいで、主人公は身動きが取れなくなる。

●正面 30センチ

「【※】ここからセリフ終わりまで、少々苦しそうに、快感をこらえるように話す※
優しく、なんとか微笑みながら。

ミネルヴァとしては、全く他意はない。
むしろ嬉しくて、優しい気持ちになっている。

『合った』事によってミネルヴァが受けている快感は、主人公がミネルヴァを受け入れて
てくれている証拠でもあるので。

だが主人公には、いやらしくからかわれているように感じられてしまう」
ふふ。

少し、驚いたわ……。

私まで……引っ張られて、……っ、しまいそう。

【小さく、飲み込むように喘ぐ。

何とか快感に耐えているので】

ん………
「♥」

ミネルヴァ、話しながら『正面30センチ』から『正面0センチ』まで近づく。

●正面 30～0センチ

「※近づきながら※ 話す。

少し余裕なさげに。

有無を言わずに、主人公にキスをしようとする。

それは治療ではなく、自分がそうしたいので。

ミネルヴァは快感にのまれ始め、治療にこそ手は抜かないものの、己の欲望も隠さなくなりつつあるので」

……御免なさい。少しだけ。

【※3回※ キスする。

軽く触れるだけだが、積極的に求めるようなキス】

ちゅ。ちゅ。ちゅっ」

ミネルヴァ、『正面0センチ』の距離で『無声音ささやき』をする。

また、このあたりから、快感で苦しそうだったのが和らぐ。

●正面 0センチ 『無声音』ささやき ※マークのセリフまでささやく

「【とても優しく、静かに、そっとささやく。

嬉しくて、優しい気持ちになっているので。

『合った』事によってミネルヴァが受けている快感は、主人公がミネルヴァを受け入れてくれている証拠でもある。

なのでミネルヴァは、主人公との精神的距離がとても近くなったように感じている。

『繋がった』とは『合わせる』術が、容易に成功したという意味で言っている」

可愛いよね。本当は怖くて、訳がわからないでしょうに……。

私を信じて、受け入れてくれている。

だから……こんなに私も。簡単に繋がってしまったのかしら。

【苦しそうにしつつも、この言葉自体はさらっと、あっさりと言う。

聞き手と主人公に『えっ、まさか、痛みを共有するやり方で患部を探した事があるの?』

と暗に気づかせる感じで】

痛みを探る用途以外で試したのは初めてだけど。

こんなにうまくいくとは思わなかったわ。

【小さく、びくつと喘ぐ。

ここまで言った途端、また強い快感が押し寄せたので】

……あ。

【※3回※ 呼吸する。

少し苦しうに、とても気持ちよさそうに】

はあ、はあ、ふうっ……♡」※

〈主人公〉

「……………」

当たり前のようなキスと優しい言葉の後に、ミネルヴァがふと、主人公を熱にとろけた目で見つめた。

主人公がそれに虚を突かれ、ただ見つめ返すにとどまっていると……ミネルヴァはそのまま主人公を引き寄せ、ぎゅっと抱きしめた。

SE5 ミネルヴァが主人公を抱きしめる音

【最初から最後まで流す】

ミネルヴァ、『正面0センチ』から『右0センチ』に移動して話す。

● 右 0センチ

「うつとりと気持ちよさそうに。」

主人公を抱きしめて、その感触を味わっている」
安心してね。

貴方の事は、必ず私が元気にするから。

【※4回※ 耳にキスして、少し舐める。

ねっとりと、気持ちよさそうに。

主人公の反応については考えていない。

快楽を求めて、無意識にそうしてしまっているのだから。

ちゅ。ちゅ。ちゅ。

れろおっ……♡

【※1回※ 呼吸する。

何とか息をついた感じで】

ふう……。

【少し間をあけてから。新しい話題を切り出す】

そうだ……あのね」

〈主人公〉

「……？」

こうして初めて深く感じたミネルヴァの体温は、とても温かかった。

重ねた胸からどくどくと彼女の心音が伝わって、主人公も、同じように鼓動が早くなる。

なのに不思議とホツとするような、そんな、言葉にできない感覚があった。もうどこにも行きたくない。ずっとこうしていてほしい。

心からそう思う。

こうなればもう主人公でなくても、己を抱きしめてくれる人に身をゆだね、何かを期待してしまっても仕方ないと思う。

出会ってまだ、数時間。

それでも主人公とミネルヴァは、とても濃密な時を過ごしたように思う。

だから、通常では起きえない速度で親しくなってもおかしくはないと主人公は思い始め、それどころか『ミネルヴァもまたそう感じてくれていたらしいのに』という気持ちを抱き始めている。

それは、心身ともに弱っていて、誰でもいいから助けてくれる人が欲しいからだ。そう自覚しているもお、この気持ちは抑えきれない。

『ばかばかしい』『いくらなんでも』と思いながら、ミネルヴァに惹かれている自分がないのだ。

ミネルヴァ、『右0センチ』から『正面15センチ』に移動して話す。

●正面 15センチ

「『淡々としているが、自信ありげに。』

『ようやく腑に落ちたわ』『納得のいく仮説だから、早速あなたに直接尋ねて、確信に変えたいの』という感じで」

……ストレスの原因がわかったの」

〈主人公〉

「……あ」

だから主人公は、ミネルヴァが今伝えんとしている事が治療がらみのようだと気づいて、少し淋しくなった。

彼女が己の職務に真摯な事は、もう理解している。

ゆえにこれは当然の行動だとわかっているが、それでもそう思ってしまったのだ。

●正面 15センチ

「『これまで通り淡々と、ごく自然に聞く。』

ミネルヴァの中では『これは治療に関する質問なので、恥ずかしい事ではない。はつきり聞いている事である』なので」

貴方……禁欲していたのでしょうか」

〈主人公〉

「……………」

しかし、ここで予想だにしない質問がやってきた。

これによって主人公の思考は一度完全に停止し、奈落よりもっと底を求めて落ちていくような感覚に襲われる。

だが次の瞬間、なんとか意識を取り戻して、

……そうだ、ここは、黙秘しましょう。

ミネルヴァがごく真面目に、医師として訊いてくれている事はわかっている。わかっているわ。

だから、そんな彼女には申し訳ないけれど。

こればかりは、こればかりは秘密にさせてもらいましょう。

と、なんとか逃げ道を模索する。

しかしその時にはもう、表情でバレバレだった事だろう。

主人公は問われるなり涙目で顔を引きつらせ、目を泳がせて。

『どうやってこの追及から逃れようか』と、必死に考えている人間の顔をしていたからだ。

●正面 15センチ

「少し間をあけてから。

少し申し訳なさそうに、だがごく自然に聞く。

主人公が、ばつが悪そうに黙り込んでしまったので。

だが、申し訳なさそうにする理由がずれている。

ミネルヴァは『自信があつたのだけれど、もしかして、見当違いの事を言ってしまったかしら。だから、彼女は黙ってしまったのかしら』と思っているので」

ああ……もし、違うのであればそう言って。

そうではないかと、思っただけだから」

〈主人公〉

「……………」

なんだかもう、泣きそうである。

医師にこんな事を尋ねられて、心配されて。

情けなさや恥ずかしさで、膝からがっくり崩れ落ちそうである。

どうしてこうなったのか。すべては己が己に鈍かったせいかな。

そのせいで、こんな事になってしまったのか……。

ミネルヴァ、硬直する主人公を見て『自分がよくない質問をしてしまった事に気づく。申し訳なさで『正面15センチ』から『正面30センチ』の距離まで離れる。』

● 正面 30センチ

「【申し訳なさそうに。内心少々慌てている。

だが、話すスピードは変わらない。

通常のゆっくり、マイペーストーンのまま、声だけ申し訳なさそうになっている。

ここでようやく『自分は、想定していたのとは違う意味で、答えにくい質問をしたらしい』と理解したので。

『言いたくないのであれば、構わないから』と言おうとして、途中で途切れる』

……御免なさい、失礼だったわね。

『治療に関わる事なら聞いてよい』と、配慮が欠けていたみたい。

言いたくないのであれば、構わないか……。」

言葉を失い、愕然とする主人公を、ミネルヴァが真面目な顔で気遣ってくれる。

今なら顔から火が出せる気がしたが、他にもっとやるべき事があるのは承知していた。

……そうだ。わかつている。

ミネルヴァはこの通り少々デリカシーに欠けるが、そこに悪意はない。

真摯に診てくれているからこそ、彼女はこのような事を聞いてきたのだ。

ならば『こればかりは』などとは言っていない。

……正直に言わなければ。

〈主人公〉

「えっと、その……」

● 正面 30センチ

「【少し驚いて。

まさか、主人公が答えてくれるとは思っていなかったのだ】

……え？」

〈主人公〉

「実はわたし、北部の出身で。アカデミー卒業までは学生寮暮らしだったので」

こうして主人公は、己の性事情について打ち明けるべく口を開いた。

だが今の彼女では、非常に遠回りな、まどろっこしい説明から始めるのが精いっぱいだ。

『結論から話せ』。

それはこれまで散々言われてきた事であり、もちろん常日頃それを心がけてはいる。

しかし、今回ばかりは、それはできなさそうだ。

ミネルヴァはなかなか話が見えず混乱するだろうが、こればかりは許してもらおうしかない。

この質問に素直に『はい・いいえ』で答えられる度胸があるなら。主人公はキス一つでこうも揺さぶられる人生を歩みはしないのだ。

●正面 30センチ

「【きょんとんとしつつも、真剣に相槌を打つ。

正直、主人公が何を言いたいのか、まだよくわからない。

まさか出身地の話から始まるとは思わなかったのだ。

だが、わからないなりに真剣に聞いて、これから理解したいと思っているので」

……ええ」

〈主人公〉

「……つまり、卒業してしまうと学生寮は出なくてはならなくて。

就職してからは、今度は国研の方で用意してくれている寮に住むはずだったんです」

●正面 30センチ

「きよとんとしつつも、真剣に相槌を打つ。

正直、主人公が何を言いたいのか、まだよくわからない。

しかしミネルヴァは、国研の職員は付属の寮に住める事は知っている。

なので『確かにそうよね。それが、私の質問の答えにどうつながるのかはわからないけれど……』と思いながら聞いている」

ええ」

〈主人公〉

「でも……ご存じの通り、失業したもので。

当然ながら、そこにも住めなくなってしまうて。

今は、学生時代の友人の家のお世話になっているんです」

正確には『学生時代の友人の家』ではなく『学生時代の友人・クロエの実家である職業斡旋所に付属する寮』なのだが、少々ややこしくなるから今は省こう。

とにかく、主人公は努力していた。

出会ったばかりの人間に、己の秘密を打ち明ける。そんな、あまりにも高いハードルを越えるために、半泣きで助走していたのだ。

●正面 30センチ

「【主人公のこれまでの話をまとめる。

主人公の話した事を復唱しつつまとめる事で、正しく理解できているか確認してもらうとしてるので」

あら……そういったご事情が。

ご実家は、北部なのね。

それで……国研（こくけん）をおやめになった後は、本来住むはずだった寮を出る事になっちゃったから。

お友達のご自宅の、一室をお借りしていたと」

〈主人公〉

「はい……そうなんです。

……で、あの。そういう事情ですから。

そこは本当に、わたしにはもったいないと言いますか。

大切にしないではいけない場所ですのうで」

● 正面 30センチ

「『穏やかに、だが真剣に相槌を打つ。』

主人公の言わんとする事が、ここで理解できたので。

また、先程の失敗を踏まえ、今度は失礼な事を言うまいと、かなり努力しながら聞いている」

ええ」

〈主人公〉

「その……友人や家族に言えない事は、絶対にできないと言いますか……」

5秒ほど沈黙。

こうしておおむね話し終えた主人公とミネルヴァの間に、しばしの沈黙が流れた。もし、このままこの沈黙が続くようなら。ミネルヴァの理解が得られないようなら。

主人公は、もっと表現を簡潔に、かつ明瞭にしなくてはならない。
できる事ならそれは避けたいが、いい加減覚悟を決めるべきなのかもしれない。
そう思っていると……。

● 正面 30センチ

「優しく相槌を打ちながら、だんだん心配そうな声になっていく。

最初の行では、内心『ハッ!』と理解し『……あ! なるほど! わかったわ!』とここまでの話の流れも含めて納得し、嬉しくなった。

だがすぐに、主人公の事がどんどんかわいそうになってくる。

主人公の境遇は、全て聞いたわけではないが、クロエから聞いた情報と、自分で診た情報、そして今の話で簡単には理解した。

主人公はこれだけ肉体的にも精神的にも追い詰められていたのに、ちよつと自分に優しくするような事もできなかった。

そう思うと『それはあんまりなのではないかしら』という気持ちになってきたので。

また、そうなってなお、友人の部屋を大切にしていた主人公の真面目さを思うと、胸が痛く、締め付けられているので。

『お友達に言えない事』とはつまり、自慰の事」

……なるほど。貴方は、そのお部屋を大切にしたかったのね。

ご厚意で住まわせてもらった場所だから、決して汚（けが）したくなかった。
だから……お友達に言えないような事はできなかったと。

【ひとときわ実感を込めて。

ミネルヴァは自分が『言いにくいなら言わなくてもいい』といった事をきちんと説明してくれ、その内容もまた真面目な人柄を裏付けるものだった事で、主人公の事を『この方……ものすごく真面目な女性なんだわ』と理解したので」
とても真面目なのね」

〈主人公〉

「あは……あはははは……。

ありがとうございます……。」

なぜか感心されてしまったが、どうにか意図は伝わったらしい。

今の主人公は羞恥心のあまり、今にも粉塵と化して風に消えそうだ。

だが、そんな自分の身体をどうにか支え、主人公は泣き笑いを浮かべる。

それでも、ミネルヴァが意外と察しのよい女性でよかった。

ここで『何をおっしゃっているのか、わからないのだけれど……』などときよとんとさ
れようものなら、主人公は恥ずかしさのあまり確実に死に、確実に砂となって消滅してい

た事だろう。

あまりにも最低な死因なので、避けられて本当に良かったと思う。

ミネルヴァ、『正面30センチ』から『正面15センチ』に近づく。

● 正面 15センチ

「優しく、いたわるように。

今の話は、主人公としては恥ずかしい告白をしたつものものである。

だが、ミネルヴァにとっては、主人公が苦悩と苦痛の記憶を話してくれたものに等しいので。『話してくれた以上は、自分がそこから解放しないと』と思っている」

なるほど……ご事情はわかったわ。

けれど……本当は。お友達の家に行った時も」

SE6 ミネルヴァが近づく音

【最初から最後まで流す】

〈主人公〉

「……え？」

だがここで、主人公はまたも不意を打たれた。

患者として情けない告白を終えたと思ったら、今後は医師がまた近寄り、右耳にささやくようにして、このような事を言ったからだ。

ミネルヴァ、『右0センチ』の距離まで近づいて『無声音ささやき』をする。

● 右 0センチ 『無声音』ささやき ※マークのセリフまでささやく

「【とても優しく、心底心配している様子で。

ミネルヴァとしては、いやらしい事を言っているという自覚がまったくないので。

それどころか『それはえっちな質問ですか』と指摘されたら、それによってようやく己の行動の過激さに気付いて、真っ赤になるほどなので」

こんな風に」※

SE7 ミネルヴァが主人公の身体をまさぐる音

【最初から流す】

【次の『ミネルヴァ』のセリフと同時に流し、セリフが終わるとともにフェードアウトする】

●右 0センチ 『無声音』 ささやき ※マークのセリフまでささやく

「『とても優しく、心底心配している様子で。

ミネルヴァとしては、いやらしい事を言って、しているという自覚がまったくないので。それどころか『それはえっちな行動ではありませんか』と指摘されたら、それによってようやく己の行動の過激さに気付いて、真っ赤になるほどなので」

身体の中でも弱い所。気持ちいい所を指で擦って。

楽になりたかったのでしょう……？」※

〈主人公〉

「！」

その言葉に、触れてくる手に、主人公の思考はまた強制停止して——……。

●右 0センチ 『無声音』 ささやき ※マークのセリフまでささやく

「『とても優しく。

意識して、主人公を包み込むような、優しい声になるように話している。当時の主人公の心情に寄り添い、慰める。

『私達は今『合ってる』からは『今、ミネルヴァは主人公の身体的な苦しみ……つまり欲求不満である事を身をもって感じ、切なくなっている。こんな苦しみを耐えた主人公は、本当にすごい。尊敬する』』という思いが込められている』

……わかるわ。隠さなくていい。

私達は今『合ってる』から。

そうよね。たとえば、それが難しい状況でも。

辛い事や、思い通りにならない事があった日は。

せめて……自分で、自分を慰めて。

少し楽になってから、眠りたかったわよね。

【少し間をあけてから。

ひととき優しく、いたわるように】

……いいのよ。今しても。

【ふと思いついたように。

自分自身の言葉で、気づかされたので。

そんなにも辛いなら『今』解消すればいい。

自分がその手伝いをすればいいと、気づかされたので。

それがいやらしい行為であるとか、今の主人公とミネルヴァの関係ではあまり適切ではない事であるとかは、全く頭がない】

そうだわ……今しましょう」※

ミネルヴァ、『右0センチ』から『正面0センチ』に移動して、キスをする。

●正面 0センチ 『無声音』ささやき ※マークのセリフまでささやく

「※1回※ キスする。

優しく、いたわるようなキス」
ちゅ」

ミネルヴァ、『正面0センチ』の距離のまま『無声音ささやき』をする。

●正面 0センチ 『無声音』ささやき ※マークのセリフまでささやく

「【とても優しく、心底心配している様子で。

ミネルヴァとしては、100パーセントの厚意と優しさの気持ちで言っているの
今は貴方に、少しでも元気になってほしいもの。

【優しく、だが有無を言わせない感じで。

100パーセントの善意で、かつこれが最良の手段だと思っているからこそ、出るよう
な声で」

……ね」

どこまでも真剣に、ただただ自分を案じてくれるミネルヴァの提案に、ただ驚いていた。

ここでフェードアウトして終了。